

## 19世紀中葉のアムール川下流域およびサハリン周辺の 先住民族交易に関するロシア民族学者の記録Ⅱ

邦訳：レオポルド・フォン・シュレンク『アムール地方の異民族たち』  
10章 交易 オリチ、ゴリド、ビラル、マネギル、ダウール

Records of Russian Ethnographers on Indigenous Trade in the Lower Amur River Basin and Sakhalin  
in the Mid-19th Century:

Japanese Translation of Leopold von Shrenk, “Ob inorodtsakh Amurskogo kraya”  
Chapter 10 Trade, Ol’chi, Gol’dy, Birary, Manegiry, Daury

監訳・解題 (Supervision and the Review)

佐々木史郎 (SASAKI Shiro, Dr.)

国立アイヌ民族博物館 名誉館長 (Honorary Director, National Ainu Museum)

翻訳 (Translation)

是澤櫻子 (KORESAWA Sakurako)

国立アイヌ民族博物館 研究員 (Research & Curatorial Fellow, National Ainu Museum)

### 1. 解題

本稿は『国立アイヌ民族博物館研究紀要』第3号に掲載された、佐々木史郎・是澤櫻子・鈴木建治「19世紀中葉のアムール川下流域およびサハリン周辺の先住民族交易に関するロシア民族学者の記録 邦訳：レオポルド・フォン・シュレンク『アムール地方の異民族たち』10章 交易 ギリヤーク」(佐々木・是澤・鈴木 2024: 263-281)の続編で、第10章の残りの部分(Шренк 1899: 298-314)を翻訳したものである。具体的には前回翻訳したギリヤーク(ニヴフ)以外のアムール川流域諸民族の交易活動に関するシュレンクの調査記録と文献を使った過去の記録との比較研究である。ここで言及されるのは、オリチ(ウリチ)、ゴリド(ナーナイ)、オロチ(オロチとウデヘ)、オロチョン、ビラル、マネギル(いずれも現在は中国領内の「鄂倫春族」に含まれる)、ダウール(ダフル)の諸民族の交易活動である。さらに今回翻訳した箇所では重要なのは、間宮林蔵の調査記録との比較が行われている点である。

林蔵が樺太(サハリン)とアムール川下流域を調査したのは1808～09(文化5～6)年であり、シュレンクの調査(1854～56年)よりも半世紀近く前にな

る。シュレンクが林蔵の調査記録を利用できたのは、Ph. F. von シーボルト(大シーボルト)のおかげである(訳註ii参照)。シーボルトは1826年の江戸参府の時に最上徳内や高橋景保らと知り合い、その際に間宮林蔵口述・村上貞助筆記による樺太とアムール川下流域の調査記録の写本を手に入れた(洞・谷澤 1988: 278)。恐らく当時手に入れることができたものは、林蔵たちが1810(文化7)年の秋に作成した『北蝦夷地部』と『東韃紀行』を底本とする写本類だったと推測される。現在国立公文書館に所蔵され、重要文化財に指定されている『北夷分界余話』と『東韃地方紀行』(両者ともに1811(文化8)年春献上)は幕府に献上され、一般の目に触れることはまずなかった。実際、巷に流布している写本類は『北蝦夷地部』と『東韃紀行』を底本とするものが圧倒的に多い。平凡社東洋文庫から『東韃地方紀行他』というタイトルで献上本の『北夷分界余話』と『東韃地方紀行』を校訂、編集、刊行した洞富雄と谷澤尚一の「解説」によれば、シーボルトの『Nippon』の図版(Tafelband)所収のアイヌ、ウイльта、ニヴフを描いた図(図352-359)は、長崎の画工でシーボルトの江戸参府に随行した川

原慶賀が初稿本の『北蝦夷地部』から模写したものであるという(洞・谷澤 1988: 279)。

しかし、シーボルトは写本類だけでなく、幕府に献上されていた『北夷分界余話』と『東韃地方紀行』も実際に目にして、写しをとっていた可能性がある。彼は『Nippon』の Textband I において、次のように述べている。

われわれは林蔵と個人的に知り合い、江戸の将軍の図書館にあったその旅行記・地図・挿絵を閲覧する機会を得た。そして注目に値するものは写しを作成し、その大部分をヨーロッパに送った(シーボルト 1977a: 256; Siebold 1975a: 129) ]

この記述から、シーボルトが 1826 年の江戸参府の際に「将軍の図書館」(der bibliothek des Sjogun) すなわち「御文庫」(紅葉山文庫) に所蔵されていた献上本の『北夷分界余話』と『東韃地方紀行』を目にして、それを写した可能性があることがわかる。原本を校訂して再版した講談社版の『Nippon』(1975 年) に付属する「解説」では、アイヌやウイльта、ニヅフに関する図版を『北夷分界余話』と『東韃地方紀行』の挿絵と比較している(Siebold 1975d: 61)。

シュレンクが目にしたのはそのシーボルトの訳だったが、年代から考えて、彼が参照したのは図録も含め 20 分冊で刊行されたその初版本(1832-1851 年、ライデンで刊行) だった可能性が高い(岩生 1977: ii)。

ただ、シーボルトは最上徳内など樺太調査経験のある研究者と親交があったとはいえ、彼自身現地へ赴いたことはなく、林蔵の記録にシュレンクほどの現実味を感じることができなかった関係で、若干ではあるが誤訳が見られる。そしてそれがシュレンクを混乱させる場面もあった。例えば、「ポホカス」を樺太西海岸中部の集落であるポロコタン(ニヅフ語ではピリャウォ) としているが、林蔵の記録ではタムラヤーというニヅフの村のハラ・イ・ダ(氏族長) の名前である。これは明らかにシーボルトの誤訳に起因する勘違いである(訳註 xv と xvi を参照)。

また、林蔵が訪れたときには 20 戸も家が並ぶ賑やかな集落だったキジが、シュレンクが訪れたときには白骨が散らばる無人の荒野になっていたことについて、シュレンクは、林蔵によればここに陶磁器工場があったはずだが、それが中国の側の意向で廃止されたのだろうと述べている。しかし、林蔵は陶器が多いと

記述していて、ここで陶磁器生産が行われていたなどとは一言もいっていない(訳註 xxviii 参照)。シーボルトの『Nippon』の翻訳者の 1 人である加藤九祚によれば、シーボルトは「陶器など多く」という部分を、*besonders viel Porzellanfabriken* (特に多くの陶磁器工場) と訳していたという(加藤 1986: 232-233) (このドイツ語の表現は 1975 年に講談社から刊行された『Nippon』の原典版の方で、シーボルトの息子のアレクサンダーとハインリッヒが関与して編集された 1897 年刊行版では、*Es wurde hier besonders viel Porzellan angefertigt* (ここでは特に大量の陶磁器が生産されていた)(Siebold 1897: 212) となっている)。そのためにシュレンクは混乱し、キジ村で陶磁器が作られなくなった理由、そして白骨散らばる荒野となってしまった理由をあれこれ考えなければならなくなってしまう。

キジ村の陶磁器工場廃止はシーボルトの誤訳に起因する事実無根の話だが、それ以外の正しく訳された部分を参照しても、シュレンクは自分の調査結果と林蔵の調査との間に顕著な相違を見出している。キジ村の消滅以外にも、活気ある交易所だったデレンも消滅し、中国の交易拠点ははるか上流の松花江沿岸のサンシン(三姓) だけとなっていた。また、林蔵の時代にはそれでも時折デレンにやってきていた樺太アイヌの一行がアムール川下流域に姿を見せることもなかった。この半世紀の間の変化を、シュレンクはロシアのアムール再進出(侵略) とそれに対する中国側の対応という観点から説明している。実際、19 世紀初頭から中期までの半世紀の間に国際情勢は急激に変化した。ロシアのアムール再進出も中国勢力のそこからの後退も、世界大の情勢変化の一環であり、一言で言えば、北東アジアに「近代」が迫ってきたのである。その近代の波はシュレンクたちの調査の直後に、アイヌ、ニヅフ、ウリチといったこの地域の地元住民だけでなく、日本、琉球、朝鮮、中国といった国々も飲み込み、その前近代的な体制を押しつぶしていく。

この章では最後に 1 つ興味深いことが書かれている。それは、アムール川上流域における交易活動と下流域の交易活動の比較である。下流域でギリヤーク(ニヅフ) が果たしていた役割を、上流域ではダウール(達斡爾族) が果たしていた。ダウールの中国と地元住民との仲介商人としての役割はその後、研究が進められたが、ニヅフの役割に関心を示したものはほとんどなく、現在ニヅフが「商業民族」だったというイ

メージは非常に弱い。しかし、シュレンクの指摘が19世紀中期当時の状況を正確に表しているとする、ニヴフの商業民族としての側面にもっと焦点が当てられるべきかと考えられる。

## 参考文献

岩生成一

1977『監修者のことば』シーボルト、フィリップ・フランツ・フォン著『日本：日本とその隣国、保護国・蝦夷・南千島列島・樺太・朝鮮・琉球諸島』の記録集。日本とヨーロッパの文書および自己の観察による』第1巻 pp. i-v、雄松堂。

加藤九祚

1986『北東アジア民族学史の研究』恒文社。

佐々木史郎・是澤櫻子・鈴木建治

2024『19世紀中葉のアムール川下流域およびサハリン周辺の先住民民族交易に関するロシア民族学者の記録 邦訳：レオポルド・フォン・シュレンク『アムール地方の異民族たち』10章交易ギリヤーク』『国立アイヌ民族博物館研究紀要』3: 263-281。

シーボルト、フィリップ・フランツ・フォン著、石山禎一、中井晶夫・齋藤信・尾崎賢治・加藤九祚・八代衛衛・末本文美士・金本正之・妹尾守雄訳

1977a『日本：日本とその隣国、保護国・蝦夷・南千島列島・樺太・朝鮮・琉球諸島』の記録集。日本とヨーロッパの文書および自己の観察による』第1巻、雄松堂。

1977b『日本：日本とその隣国、保護国・蝦夷・南千島列島・樺太・朝鮮・琉球諸島』の記録集。日本とヨーロッパの文書および自己の観察による』第6巻、雄松堂

1977c『日本：日本とその隣国、保護国・蝦夷・南千島列島・樺太・朝鮮・琉球諸島』の記録集。日本とヨーロッパの文書および自己の観察による』図録 第2巻、雄松堂

洞富雄・谷澤尚一

1988『解説』問宮林蔵述・村上貞助編、洞富雄・谷澤尚一編注『東韃地方紀行他』平凡社（東洋文庫 484）、pp.245-284。

遼寧省檔案館・遼寧省社会科学院歴史研究所・瀋陽故宮博物館編

1984『三姓副都統衙門滿文檔案訳編』瀋陽：遼瀋書社

Шренк, Л. И.

1899 Об инородцах амурского края, том 2. Санкт Петербург: Императорская академия наук.

Siebold, Ph. F. von

1897 Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen neben- und Schutzländern Jezo mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und den Liukiu-Inseln. Würzburg, Leipzig: Verlag der K.U.K. Hofbuchhandlung von Leo Woerl.

1975a Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan. Textband I, Tokyo: Kodansha.

1975b Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan. Textband II, Tokyo: Kodansha.

1975c Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan. Tafelband II, Tokyo: Kodansha.

1975d『シーボルト「日本」解説』Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan 付録、講談社

## 2. 邦訳：レオポルド・フォン・シュレンク『アムール地方の異民族たち』「10章 交易」のうちオリチ、ゴリド、ピラル、マネギル、ダウールに関する記述

### 《凡例》

- ・本稿の原文は『Об инородцах Амурского края』（アムール地方の異民族について）に所収されている「Глава 10. Торговля」（10章 交易）のうち、オリチ、ゴリド、ピラル、マネギル、ダウールに関して記述した298頁から314頁である。
- ・原文は書き流しであるため、訳文では小見出しをつけた。小見出しの内容は訳者の判断でつけたものであり、原文と区別するために【】を用いている。
- ・民族名はシュレンクが記したロシア語原文のまま、それを単数・男性形でカタカナ表記とした。但し、オロチとオリチについては、常用されている複数形を使用した。
- ・現在のロシアの公的名称では、ギリヤーク（Гиляк）はニヴフ、ゴリド（Гольд）はナーナイ、オリチ（Ольча）はウリチ、オロク（Орок）はウイルタ、ツングース（Тунгус）はエヴェンキ、ヤクート（Якут）はサハとなっている。その他、ネギダール（Негидаль）、アイヌ（Айну）、サマギール（Самагир）とした（公的にはサマギールは現在ナーナイの一分派とされている）。ピラル、マネギル、オロチヨンの子孫は現在のロシアではエヴェンキとされ、中国ではオロチヨン（鄂倫春）とされる。また、ダウールは現在のロシアの民族としては認識されておらず、中国側ではダフル（達斡爾）と呼ばれる。ソロンは、現在の中国ではソロン・エヴェンキ（索倫鄂温克）とされる。また、オロチ（Орочи）について、シュレンクは現在のオロチだけでなくウデへも含んだ用語として用いている。
- ・動物名、地名はカタカナ表記をとった。原則としてシュレンクが記した通りの名前を用いたが、一部書き間違いと思われる箇所については訳注等にて補足を付した。読者の便宜のため、原文に基づいて主要な地名を記した地図を作成し、これに付した（図1）。
- ・原文で固有名詞として《》で示されたものは、訳

出の際に「」を付した。

- ・注について、シュレンク自身が記したものは本文中に丸括弧で挿入し、訳者によるものは角括弧〔 〕で挿入、あるいは訳注としてまとめた。
- ・シュレンクの記述を読解する一助になるよう、『東韃地方紀行 中巻』（国立公文書館蔵）および『カラフトナヨロ惣乙名文書（ヤエンコロアイヌ文書）』（北海道大学附属図書館蔵）を参考画像として適宜掲載した。参考画像の番号は、文中で□で示した。

## 第10章 交易（298～314頁）

### 【アムール川下流域の交易活動—オリチとゴリドの場合】

ギリヤークに次いでアムール川下流域で最も大規模な交易を行っているのはオリチであり、同じ交通手段を使い、経路も部分的に重なる。ギリヤークよりも積極的な狩猟者ではあるが、自分たちの交易で使うためには自らの狩猟で得たものだけでは満足せず、近隣の狩猟民族にも追加の産物を切実に求める。しかしながらこれに関連する彼らの活動範囲は、ギリヤークとは異なる。ウディリ湖のサマギール集落は、ギリヤークとオリチが同じ場で交易をする唯一の中心地である。しかし、それとは別に、ネギダールとの取引を除くと、私たちがみてきたように、前者〔ギリヤーク〕の仲介活動はすべて、オホーツクとサハリンのギリヤーク、オロク、アイヌなど北と東に向けられたものである。それとは反対に、オリチの仲介は南の沿海地方のオロチ<sup>i</sup>へと向かう川の河口に沿って広がっている。最初にみたところでは、なぜオリチの活動範囲が同種族のオロクに向けられていないのかを疑問に思った。しかし、後者〔オロク〕は地理学的にはサハリン北東部におり、言語的に全く異なるギリヤークの影響下にある。そしてこれは交易に限らず、あらゆる多くの関係において言えることである。

オリチとオロチの関係もまた、主に両者の居住地のなかを通る自然の連絡路によって条件づけられており、このような物事の秩序を可能にしている。オリチは彼らにとって唯一の沿海地域であるデ・カストリ湾から出て、沿海地方のオロチが住む海岸に沿って南に下り、大陸の中国人集落に到着する。1855年5月に同地を訪れたディトマルは、ギリヤークと同様の種類の軽量の船に乗ってそのような旅から故郷へ帰るオリチの一行に出会った（K. v. Ditmar, Reisen

u. Aufenthalt in Kamtschatka in den J. 1854-1855, 1. Theil. (Beitr. zur Kenntn. des Russ. Reiches, 3. Folge, Bd. VII, p.818) [299頁注1]）。オリチの土地の中心部からアムールを経て海に向かう最短の自然道は、デ・カストリ湾の北にあるタバ湾に通じている。この道はアムール川から東にあるキジ湖を通り、北東からキジ湖に合流するタバ川に沿って進む。さらにこの川は、ごく狭く、部分的には沼地帯になっているような土地でタバ湾から隔てられているだけである。この名の川から海まで、船は横方向に並んだ丸太の列の上を曳かれる。これらの丸太は、古くからオリチ自身が敷いたものに違いない。これらの道を通って、アムール川からデ・カストリ湾、そして「ビチ」（ビチ川のゴリド）に到着した。この話から、ラベルーズはタートル海峡の北端でサハリンが干潮時に突出する砂地によって大陸とつながっているという誤った結論を導き出した。1809年、間宮林蔵（『東韃紀行』（シーボルト、ニッポンVII、p.171）[299頁注2]）<sup>ii</sup>は、同じ道でクラフト（サハリン）〔原文ママ、カラフトのこと〕からサンタンあるいはアムール川下流域を踏破した。しかし、オリチとオロチの冬の交流は、主により広いトゥムジ川<sup>iii</sup>で行われる。この旅は、橇かスキーを使い、自分の後ろに犬橇をひいて行われる。ペ、ヤイ、ミエタ、ヘラソ<sup>iv</sup>の峠を越え、氷に覆われたトゥムジ川に沿っていき、彼らは皇帝湾〔現在のソヴィエト湾〕近くのトゥムジ川の河口に到着する。

以上のことから明らかなように、オリチが交易や仲介活動を行う地域は非常に広いが、ギリヤークほど手広く展開しているわけではなく、いずれにせよあまり条件のよい土地ではない。それは、オロチと交易関係を持ち彼らの土地の毛皮獣の富を利用しているのはオリチだけでなく、より有利な地理的条件にあるゴリドも同様にその土地と資源を利用しているからである。殊にホンガラ川〔現在のフンガリー川〕、ナイヘ川〔現在のアニューイ川〕、ムナム川、その他ウスリー川の右岸の支流などの河岸に住むゴリドはオロチの直接の隣人であり、前述の海路からは遠く離れているが、これらの河川には多かれ少なかれ海岸への便利な連絡路がある。

オリチが前述の道で入手した毛皮は、ギリヤークと同様、中国との交易のための商品として役立っている。しかし、この交易から得られる利益は、ギリヤークよりもはるかに少ない。というのも彼らは、スンガリへの長く困難な旅を避けるため、彼らの土地にある

ブリ、モンゴル、キジ、アディなどの場所を訪れ、多少なりとも長期間滞在する中国の小商人に商品を売るからだ。これらの小商人たちは、独自に交易を行うわけではなく、土着民と中国の大商人との仲介役を務めるだけだが、それでも彼らの個人的な利益を完璧に守ることができる。オリチには、ギリヤークのような、このずるがしこい商人に対して土地への立ち入りを制限する勇気も行動力もなかった。しかし、例えば南部のゴリドやオロチ（ターズ）のように、完全に彼らの手中にあるとは言いきれない。オリチは可能な限り彼らを避け、スンガリで中国人と個人的に商売を行おうとしている。

オリチのスンガリへの旅については、ギリヤークについてすでに述べたことを繰り返すしかない。彼らは、サハリンでの和人ととのさらなる交易のために中国の絹織物を手に入れることを主な目的として、同じ手段で、同じ目的を持って旅をする。彼らの後者〔サハリン〕への道は、キジ湖とタバ川を通る。この島におけるオリチの交易活動は、シザム<sup>7</sup>におけるギリヤークのそれと同じであり、従って、これ以上ここで説明する必要はないだろう。

オリチは、交易活動においてはギリヤークにはるかに及ばないが、それにもかかわらず、大規模かつ成功裏に交易を行っている。いずれにせよ、2つの文化的民族〔中国人と和人〕の間をとりもつという手腕は注目に値するものであると認識せざるを得ない。オリチが純粋なツングース系という点はなおさら注目に値する。ツングース系は往々にして思慮が浅く、遊牧的狩猟生活の傾向が強く、特に商業精神がいささかも見られない種族だからである。しかし、忘れてはならないのは、オリチは昔からギリヤークと隣り合って生活していたため、彼らとの長い接触と交流によって、隣人の性格、習慣、性質に完全に同化する時間があっただけである。その結果、彼らの商業精神の幅広い発展と活発な交易活動も、もっぱらギリヤークの影響下にあると考えなければならない。

同じようなギリヤークの影響力はアムール川をさらにさかのぼり、はるかに弱いものの、オリチからゴリドへと広がっている。海岸のオロチ、スンガリ沿岸の中国人、さらにはサハリンの和人ととの交易関係についてはすでに述べた。しかし、一般に満洲・中国への依存がゴリドの交易活動を強く制約している。満洲の役人や中国商人による弾圧や強奪のせいで、ゴリドは自分たちの財産を極めて不安定なものにしている。そのた

め、当然ながら彼らの活力や利益への嗜好は鈍り、他のツングース系種族と同様、一般的に抵抗することができず、怠惰と無関心にますます身を任せるようになっていく。スンガリ川に近づくにつれ、このことはますます顕著になる。スンガリ川は、アムール川下流域における満洲・中国支配の出発点であるようだ。したがって、アムール川下流域の異民族の交易の主要市場はスンガリ川にある。しかしそれにもかかわらず、彼らの交易活動は、この市場から遠ざかるにつれて、つまり、この地域における満洲・中国の支配が次第に弱まるにつれて、ますます活発になり、ついには異民族の中で最も自立的で独立的なギリヤークにおいてその発展度が最高潮に達するのである。

#### 【間宮林蔵の記録】

私が滞在していたときのアムール川下流域における交易の状況はこのようなものだった。しかし、過去を振り返る必要はある。ほんの半世紀前に目を向けるだけで違ったものが見えてくる。また、これらの過去と私の個人的な観察との間に類似点を描くことも大変興味深いことである。特に、このようにして、近い将来、アムール川下流域とその民族の歴史の一ページが明らかになるのだから。そのための材料は、1808年から1809年のアムール川下流域に関する間宮林蔵の情報にある。彼が日本政府の依頼でアムール川下流域を調査したことはすでに述べた。1807年にロシアがアニワ湾の日本入植地を破壊し<sup>vi</sup>、その再発を恐れた日本政府は、ロシアによって占領された場所を知るという目的をもってサハリンとアムール川の状況をより正確に調査しようと考えていた。間宮林蔵は島を出る前に、大陸の対岸の海岸からそう遠くないところに、非常に頻繁に利用される交易の中心地デレンがあることを知った（間宮林蔵『東鞆地方紀行』（シーボルト、日本、VII、169頁）[301頁注1]）。そして、彼はそこに赴いた。先述の路程でキジ湖を経由して同名の村に到着し、アムール川を遡上して3日後の8月10日にデレンに到着した。最初は外国人として冷ややかに迎えられたが、やがて満洲の役人たち、そして彼らの働きかけで他の人々も彼に尊敬を表すようになった。間宮林蔵は少なくとも7日間はデレンに滞在し、その場所と風俗を詳細に描写している（L. c., 173-176頁 [301頁注2]）。彼の記述の中で最も興味深いものをいくつか紹介しよう。デレンはアムール川の右岸の平地にあり、そこは密集した灌木の中に見えなくなっ

ている。市場のための場所は二重の柵で囲まれた広大な四角形の形をしていた [参考画像1]。

両側と奥には交易の建物が広がっていた。その柵の奥の中央に門がひとつだけの空間があり、そこに番所が設けられていて、満洲の役人と訪れた商人との間で相互に交換される品物や贈り物が保管されていた。役人たちはデレンに定住していたわけではなく、夏になると「イチュオ・フォット」から交易のために訪れるだけだった。間宮林蔵によれば、後者はデレンからアムール川を数(くり [里]) 遡ったところにあるが、それがイチャ・ホトン、すなわちサンシン<sup>vii</sup>であることはすぐにわかる(間宮林蔵は、満洲の役人の一人がデレンからサンセイ [サンシン] に向かったときに立ち会ったことがある [302 頁注1])。間宮林蔵は、これらの役人を3つの階級に分けている。最初の、最上級の役人は全体のなかで3人しかいない。彼らは絹織物かサテンの上衣を着て、銅の丸い飾りと絹の房が垂れ下がった「ロティンガ」(わら)の帽子をかぶっている [参考画像2]。

二番目は50から60人おり、プリント柄の服を着ている [参考画像3]。

三番目は非常に多くの人があり、間宮林蔵はその数を明らかにできないとした。というのは彼らは〈サンタン〉(オリチヤギリヤーク)と〈コルデッケ〉(ゴリド)と全く同じ服を着ていたからである。これらの下級の〈役人〉の中には、単なる警備員など、夜通し番所にとどまるものもいた。上級の役人は朝のみそこに現れ、交易が終わると、夜は家に、つまり岸にあげた船に戻った。その目的のため、船には食堂、樹皮でつくった天蓋、板でつくった小屋が備え付けられていた [参考画像4]。

間宮林蔵のような来訪した多くの商人(異民族出身)は、市場の前の川岸にある樹皮でできた仮小屋に住んでいた [参考画像5]。

新しく到着した商人は、番所にいる満洲役人に2回姿を見せることが慣習だった。1回目は挨拶として、2回目は贈り物を贈った。1回目の場合、満洲役人の前で帽子を取って三度礼拝し(おそらく膝をつけて)、一方の満洲役人は、歓迎としてウォッカ(日本では「サキ」[302 頁注2])、米、きびを渡した<sup>viii</sup>。2回目の場合は、〈贈り物〉——主としてクロテンの毛皮——を持ってきて、役人に渡し、お返しに絹織物を受け取った。また、船の漕ぎ手たちは型押しプリントされた布<sup>ix</sup>を受け取った。この時も商人は頭を出し、

満洲の役人の前で3回お辞儀をし、彼らの前の床に座った。一方、役人たちは椅子(おそらく低い腰掛)に座った [参考画像6]。

これらの規則の全ては、外国の商人のみに適用された。中国人(間宮林蔵は彼らのことを、役人と同じように満洲人と呼んでいる [302 頁注3])は、何の制約も受けることなく、事前に上級の役人に姿を見せることなく自由に交易することができた。外国人(アムール地方の土着民の住人)からのみ取り立てられた〈贈り物〉は交易の権利に対する貢物であったことは疑いない。彼らはこれらを遂行することで、自分の取引を自由にできた。売り手と買い手が多く集まるため、旅行者によると、市場は毎日「想像を絶する混乱に満ちあふれ、罵声や窃盗が日常茶飯事だった。確かに秩序を呼びかけるために鐘(ゴングに違いない)を鳴らすこともあるが、その効果は微々たるもので、人混みは夜遅くまで続いた」 [参考画像7]。

しかし、こうしたすべてにもかかわらず、問題が古くからの慣習や政府の規制に関する場合は、それらの遵守が厳しく求められ、厳格に実施された。間宮林蔵の目の前で、上級役人の一人が、従来への要請に応じようとしないう外国人を棍棒で殴りつけた。しかし、罰と改悛の後、この外国人は何ら支障なく交易を続けた。来訪した商人たちは、主に動物の毛皮を販売していた。彼らは毛皮を束ねて脇に抱え、ウォッカ、タバコ、絹織物、鉄などと引き換えにそれを求める人々に提供していた [参考画像8]。

当時、アムール川下流域、キジからたった3日間の距離にある場所に、毎年夏になると中国商人やアムール川下流域の多くの異民族たちが活発な交易を行うための交易の中心が存在していた。この交易は、サンシンから特別に派遣された満洲役人たちの監督と管理下で行われていた。デレンでは、ほぼすべてが今のサンシンと同じように行われていた。満洲の役人たちは、ここでも同様に、訪問する土着民を蔑み、貢物を課し、抑圧するなどしていた。

#### 【デレンについて】

間宮林蔵が言及する番所からではあるが、デレンの場所は正確に特定できる。しかし、今はその痕跡すら残っていない。かつて活気あったこの中心地は、アムール川右岸のやや高台にある平地地帯に位置し、現在はディラ村があり、そこには2軒のユルタが約1ヴェルスタ<sup>x</sup>離れて建っているだけである。私は夏

も冬も一度ならず訪れた。ユルタのうちの一つは湾の奥の低地にあり、もう一つは川の上流、やや高い岸辺、小さな岬の隣に建っていた。この場所はオリチの土地にあるものの、しかしながら両方のユルタはゴリドのものだった。両方の所有者は、自分たちの居住地を「ディラ」と呼んでおり、おそらく周囲全体の呼び名になっているのだろう（私の通訳もゴリドだが、しかしながら、上流にあるユルタを「モングロマイ」と呼んでおり、おそらく他と区別するためだった [303頁注1]）。つまり、その沿岸と隣接する平野全体を指しているのだ。以前のデレンがまさにこの場所にあったことは、当時と今の地名の部分的な類似が証明している。加えて、キジと今のディラの間の距離も考慮すると、間宮林蔵のデレンに関する記述と完全に一致している。さらに、キジとデレンの間を調査した日本の探検家が言及した「サイ、ホルベ、クヴォレ、ウルゲ」<sup>xi</sup>という全ての地名は、どういうわけかジャイ、ボルビ（この村の地名について日本の探検家（1.p.172）は、岩が多いと正しく評している [303頁注2]）、クブトウイ、ウィッリなどの現在のオリチの村の名前と完全に一致している。

しかし、半世紀前には活発な交易が盛んに行われていたその場所では、満洲人、中国人、そして数多くの土着民の「人混みが混じり合う」「想像を絶する混乱」が支配していた<sup>xii</sup>。満洲の役人が鐘を鳴らして秩序を呼びかけていた場所は、今は草に覆われた荒れ果てた平地が広がり、わずかに2つの貧しいユルタだけが点在している。

アムール川とその下流に私が滞在していた間、満洲・中国政府の監視および保護下で商人が集まる交易の中心地は、もはや一つも存在しなかった。この広大な地域には、まれに個々の中国や満洲の商人が見られるだけで、今、アムール川下流域の異民族が交易に訪れる唯一の拠点、スナガリ川沿いのサンシンである。このように、間宮林蔵の調査と私の調査の間の半世紀の間に、満洲・中国人の公式な交易活動が衰退し、アムール川からスナガリ川へ完全に後退していったことは疑問の余地がない。

#### 【チーフについて】

交易の面では、アムール川下流域における満洲・中国の影響力は著しく衰弱した。その要因も、間宮林蔵の著作（1巻、179-181頁 [304頁注1]）で明確に説明されている。この探検者がサハリン島に滞在してい

た頃（1808年）、島に住むアイヌとギリヤークは満洲に属する貢納者だった。後者 [ギリヤーク] は、彼らの中からハラタ<sup>xiii</sup>またはカジンタ<sup>xiv</sup>、すなわちチーフを選出し、毎年デレンに貢物（間宮林蔵によると「贈り物」）として毛皮を運ばなければならなかった。これは、アムールからデレンに訪れる商人たちがしていたのと同じだった。間宮林蔵はデレンでそのようなチーフたちの何人かを目撃した。例えば、「ダムラヴォ」と「ポホカヌ」つまり、ギリヤークの村のタムリヤ・ヴォとアイヌ・ギリヤークのポロ・コタン（ポホカヌは、おそらく他ならぬポロコタンの間違いであろう。そして間宮林蔵もこの名称に疑問符をつけている。日本語の文字には「l」という文字は存在せず「r」という文字に置き換えられるため、ダムラヴォは、間違いなくタムリヤ・ヴォである。[304頁注2]）あるいはピリヤ・ヴォから来た者たちである<sup>xv</sup>。日本の探検家が島民に彼らがどのように満洲の貢納者になったのかと尋ねたとき、彼らは次のように答えた。「すでに昔から、満洲の船が毛皮商品を得るために毎年来ていた。しかし、来訪者は土着民に対してとても無作法で、その行動はしばしば喧嘩や殴り合いになった。最終的に、満洲の部隊が島に上陸し、監視・占領した。土着民の大多数は恐怖し、山へ逃げた。沿岸に残ったものたちを、満洲人は自分たちのもとに呼び寄せ、彼らの交渉に参加し、彼らの中から一人のハラタ、あるいはチーフを選んだ。これらは全て島の西海岸のイトイ（イトイコタン・イトイエ）でおこった。その後、満洲人はさらに島の東海岸のアイヌの居住地の北部で二人の土着民をチーフに任命し（間宮林蔵は、この3人のハラタの名前も知っている [304頁注3]<sup>xvi</sup>）、加えて、チーフの補佐役であるカジンタを設置した。毎年、デレンでの満洲役人への贈り物（年貢）は、黒色の海獺<sup>xvii</sup>の毛皮でなければならなかった。満洲人は、今度は自ら、金が織り込まれた絹の布を訪れたアイヌに贈り、残りの商品を安価で提供する約束をした。」モガミ・トクナイと間宮林蔵の絵図を原典にシーボルト（CM. Atlas zu Siebold's Nippon, Tab. XXV. [304頁注4]）が作成した地図では、イトイ、イトイコタン、イトイエは、オチジ [オッチシ] 岬（デ・ラ・ジョンキエル湾の南端）に位置しており、これはギリヤークのドウイ村であることは他に疑いようがない。このように先述の話は、サハリンのギリヤークが満洲人によって征服されたり、課税されたことと明らかに関係がある。

間宮林蔵はサハリンのアイヌについても類似した話を聞いた。彼はこの件について「尊敬すべき知識が豊富な人々」—70から75歳の4人の老人（その名前を彼は記している）—に質問を投げかけた<sup>xvii</sup>。彼は次のような話を聞いた。「若い頃、ナヨロにはヤイエピラカンという意地悪で短気なチーフが住んでいた。満洲人に支配されていたスメレンクルとサンタン（ギリヤークとオリチ）がサハリンに交易をしに来たとき、彼は、彼らを殺害するように命令し、彼らが持ち込んだ商品を略奪して自分のものにした。しかしながら、彼らの何人かは逃げのび、デレンに戻り、満洲当局に陳情を申し立てた。翌年、サハリンの海岸には3隻の満洲船が到着し、スメレンクルとサンタンの部隊を上陸させた。悪行に関与していた者たちは捕虜にされ、彼らとともに近隣集落の数人の老人たちも捕らえられた。後者は、不幸な商人たちにしかるべき援助をしなかったためである。捕虜たちは自分たちの身代金として全財産を差し出し、満洲人たちはそれを受け入れて赦免した。しかし、ヤイエピラカンの悪行は、これで償われたわけではなかった。加えて、満洲人はチーフの二人の息子<sup>xix</sup>を人質として連れ去り、今後、カラフト人（サハリン・アイヌ）が満洲人に従属すること、以降は毎年デレン<sup>xx</sup>に動物の毛皮を貢物として持ってくることを要求した。その代わりに、彼らには返礼の贈り物、商品の安価での提供、デレンへの訪問時の保護が約束された。ヤイエピラカンの息子たちが大陸<sup>xxi</sup>に送られて以来、貢物を献上できなかった場合は、満洲人が自身の息子や兄弟を連れていくという慣習が定着した。毎年正確に貢物が支払われると、人質たちは戻ってきて、ハラタやカジンタとして任命され、満洲当局から手書きの任命書を受け取っていた。」ちなみに、間宮林蔵は、ナヨロのチーフ、ヤイエンクルがそのような証明書を持っているのを目にしたが、満洲語を知らなかったため、読むことができなかった。「その後のハラタとカジンタ」は、間宮林蔵の話の続きでは、「毎年、数人の土着民をひきつれ、満洲役人に特定の贈り物をデレンまで持って行った。今でも、ハラタやカジンタには、土着民の住民のなかでもっとも立派で有能な人物が任命されている。現在、その数は8人とどまっている。ナヨロに1人のハラタ、西海岸に三人のカジンタ、東海岸に4人のカジンタが任命されている（彼らの名前に続いて、アイヌの居住地域が示されている）<sup>xxii</sup>。しかし、近年、カラフトの毛皮の量が減少し、チーフたちはデレンへの貢物をもつ

ていくのは、もはや毎年ではなく、3年に1度、ついには5年に1度になった。その後、満洲人はサンタンを通じて土着民に対し、定められた貢物を至急支払うように要求した。それに基づいて、今年はウジヨロ〔ウショロ〕、ナヨロ、ライチシのアイヌが自らデレンへ貢物を運んだ。」林蔵は彼らがデレンへ向かう途中で会っており、どのような貢物を、どのような事情で持っていくのかを質問した。貢物は、黒色の海獺<sup>xxiii</sup>の毛皮であった。チーフたちは、満洲役人たちが数年にわたる貢物の滞納に大いに不満を抱いており、今後満洲人への好意的な関係を重んじ、約束を果たすことにより一層努めるよう厳重な警告を与えたと林蔵に伝えた。

これらの記録から、当初は交易の名においてサハリンに訪れていた満洲人たちは、遅くとも18世紀半ば頃には、ギリヤークやアイヌら現地住民を自らの貢納者に変えていたことは明らかである。このように、後者〔アイヌ〕は、オリチやギリヤークを含むアムール川下流域の異民族たちと同様に、満洲人たちに従属する関係におかれることになった。満洲人は、サハリンにおいて、毎年デレンへ毛皮の貢物を納める義務を負うチーフを任命した。この義務は、常に厳格に守られていたわけではないが、間宮林蔵の滞在時は、まだ完全に有効であった。我々がすでに何度も指摘したように、日本の探検者のこれらの証言は、十分な信用に値する。我々はさらに、ヨーロッパの資料からもいくつかの情報を引用することができる。例えば、クルーゼンシュテルン（『世界周航記』第2巻、176頁〔306頁注1〕）は、1805年のサハリン北端のナジエジュダ湾—ングイブルヴォ村であろう—での自身のギリヤーク（「タタールたち」）との出会いについて語り、現地人の一人が赤い絹の生地金の花柄をほどこした中国風のカフタンを着ていたと言及している。間違いなく、そのチーフは間宮林蔵が証言した、満洲人に任命されたハラタかカジンタのうちの一人であった。この点に関するさらに明確な記述は、Fr. シュミット（*Histor. Bericht etc.*, p. 94. [306頁注2]）に見られる。彼は1860年にナヨロで最も尊敬されているアイヌのセタクレロ〔シトクレランのこと〕という老人と知り合った。彼はアイヌのチーフとして、日本人から彼に贈られた刀を持っていた。彼は、彼の父がアイヌのチーフとして任命されたことを示した満洲語で書かれた文書を保管していた〔参考画像9〕。

彼の父親<sup>xxiv</sup>は、サンシンへの旅のなかで、満洲当

局からそれを受け取った。これらヨーロッパの探検者たちの証言は、間宮林蔵の報告を完全に疑いの余地がないものとしている。しかし、私には、セタクレロの父が訪問した場所についての最後の証言は、誤解が入り込んでいるように思われる。彼の旅の目的地は明らかに、スンガリのサンシンではなく、当時の状況に鑑みると、アムールのデレンである。このような誤解は、セタクレロ自身が、彼の証言によると一度も満洲に行ったことがないため、より生じやすかった。

### 【シュレンクと間宮林蔵の記録の比較】

では、間宮林蔵の証言と、半世紀を経て、私がこの地方を訪れた際に、満洲・中国人がアムール川下流域の異民族との関係において占めていた状況に関する事実を比較してみよう。この状況をより明瞭に理解するために、我々がこれまで何度も言及してきた主要な特徴を確認してみよう。私のアムール滞在中は、満洲人も、中国人も、サハリンへの交易の旅はもはやしていなかった（すでにセタクレロは、シュミットの質問に対して、ここ（ナヨロ）で満洲人を見たことはないと答えている。彼の言葉によると、そこへ交易にやってくるのは「サンタ」（オリチ）や「スメリ」（ギリヤーク）のみだった（Schmidt, l. c., p. 94）。[307頁注1]）。現地のギリヤークとアイヌは、すでに満洲人への貢納者ではなく、彼らのなかから選ばれた新しいチーフもいなかった。ほとんど同じような状況が大陸でもみられた。それはアムール・ギリヤークのもとには満洲役人だけでなく、中国商人もやって来ていないことに表れている。オリチは、一時的に中国商人が現れたとしても、それは個人的な目的のために他ならなかった。動物の毛皮による貢納については、サンシンにおいて、自由交易の権利のためだけに課されていた。アムール川下流域の異民族の満洲・中国人への貢納者は、私の滞在時は、ゴリドのみだった。彼らには、ゴリン川の河口付近のミュルキ〔現在のコムソモーリスク・ナ・アムール市の一部〕に、満洲役人が税を徴収するための宿営地があった。これらのことから分かるように、間宮林蔵のアムール地方訪問と私の訪問の間には、サハリンとアムール川下流域の完全な解放、つまり、アイヌ、ギリヤーク、オリチの満洲・中国支配からの解放があった。

### 【満洲・中国の影響力衰退の要因についての考察】

しかし、その解放はどのような方法で実行されたの

だろうか？ 適切な資料が不足しているため、満洲人のこのような後退が、土着民の努力ゆえに、あるいは日本人かロシア人の圧力によって暴力的に行われたことは認められない。すべては、おそらく満洲・中国政府の自身の主導により平和裏に行われたと考えるべきだろう。その原因は、隣接する民族、特にロシア人からの敵意ある侵攻、そして地域を占領する可能性に対する危惧である。18世紀末のタートル海峡には、すでにヨーロッパの船が来ていた。例えば、ラベルーズとブラウトン〔プロトンのこと〕指揮下の船は、サハリン西海岸とデ・カストリ湾で土着民との接触をはじめていた。1805年には、クルーゼンシュテルンが自身の船「ナジェジュダ」号でサハリン北部の水域、アムール・リマンの北の入口に停留した。次の2年間（1806年と1807年）、フヴォストフとダヴィドフはアニワ湾の日本人居住地の侵略に関わった。最後の事件について満洲・中国当局は事前に知らされておらず、少なくとも間宮林蔵から本件について聞かされた。このことが、林蔵のアムールおよびサハリンの調査の動機となったのである。デレンでは、我々の調査者は、満洲役人と頻繁かつ密接な関係をもっていた。彼から私たちが知るところでは、アムグン（「ホンゴ」）川に沿って航海するロシア人の船が、時折アムールに立ち寄り、デレンまで到達することがあった<sup>xxv</sup>。これらを考慮すると、中国政府は、アムール地域に関するロシア人の意図を信用せず、地域での自身の優位性が脅かされるのではないかと恐れるようになった。中国政府は、自身の国に破壊をもたらしかねない敵対的な争いを避けるため、17世紀にアムール川上流域のロシア人に対してすでに実行した政策を実施することを決めた。この政策は、敵の攻撃に直接さらされる地域から撤退するもので、自分たちと周囲の土地の間に、できるだけ人影がなく荒廃した地域を残すことを目的としていた。しかし、今回は単なる懸念に過ぎなかったため、ダウールとデュチェリのノニとフルハへの移住というような、それまで彼らが周到に開拓していたアムール全体を荒廃させるような急進的な方法は求められなかった<sup>xxvi</sup>。今回の場合、満洲人はサハリンとアムール川下流域との公式な関係を断つことで十分だと思なした。中国政府は、交易を主導し税の徴収を行う目的で役人を送ることを止めた。しかし、サンシンに来訪する土着民たちに早急に税を課すことで、自身の利益としようとした。最終的に、最も直接的な攻撃を受ける可能性がある地域一体を荒廃させることに決定

した。それは、アムール川沿いからキジまで、キジ湖とタバ川を横切って海にいたる、デレンとサハリンを結ぶ直接的で最短の地帯であった。この道は、以前は満洲人が使用していた。中国政府が最初の二つの方法を採用したことはすでに先に述べた通りであり、今は同時に実際に最後の手段に頼ったこと、すなわち、先述のアムールの空間を荒廃させたことを証明することが残されている。

### 【キジについて】

再び間宮林蔵の話に戻ろう。彼の道はまさにその方向 [タバ湾からキジ湖を通してアムール川へ向かう道] へと続いていた。彼の証言は、しかし、この場合は乏しいのだが、50年を経過した私の個人的な経験と比較すると、上記の地域でこの期間に大きな変化が生じていたという結論に達せざるを得ない。当然のことだが、私は、キジ湖沿岸に存在するヌックランカタという場所についての間宮林蔵の証言には意義を見出せない。というのは、私の時、そこは全くの無人だったからだ<sup>xxvii</sup>。この場合、彼の証言は、それが村なのか土着民の旅行者が単に好んで宿泊する場所であったのかを明確にしていないため、注目にも値しない。間宮林蔵のキジ村に関する証言の方が、はるかに重要である。彼は、私の2倍の住宅数を数えている（およそ20戸）（彼はまた、居住用の建物と貯蔵庫、商品用の倉庫を区別している [308頁注1]）。そこには、満洲役人が住んでいた。1人のハラタ、2人のカジンタである。そこには、中国商人が訪れ、間宮林蔵が語ったように、時には「様々な種類の宴や酒宴が開かれ、リュートを弾き、太鼓を叩いたりする」。要するに、そこは活気ある重要な拠点なのである。しかし驚いたことに、キジ村へ続く緩やかな傾斜を登っていく途中、私はそれまでアムール地域で見たことがない大量の人間の頭骨と骨に遭遇した。これはどうやって説明できるだろうか？ もしこれらの頭骨や骨が当該地の墓地（小さな家の形をした廟）から来たものだとすれば、その墓地は非常に広大なものでなければならない。しかし、ここにはこのような廟の痕跡はなく、遺体とともに通常埋葬される衣服やその他の遺物もなかった。もしここに墓地が存在していたとしても、僅か前に隣接して設立されたマリンスク哨所の人々によって破壊されたと推測することは決してできない。その場合、その哨所に最も近いホト村の2つのユルタの廟が完全に無傷である理由を説明できないからで

ある（これらの墓の一つから、私は上記の頭蓋骨（T. l. 306頁、図6、tab. V-IX）を自ら取り出し、図示した [309頁注1]）。頭骨と骨の形状をみると、すでに長い間、空気にさらされていたことが分かる。それゆえ、私が今から説明しようとする理由以外のことは、考えられないのである。

この場合、私たちにとって、キジとその付近に《特に多くの陶磁器工場》が存在したという間宮林蔵の証言は非常に重要である<sup>xxviii</sup>。先ほども記したがここで簡潔に繰り返すと、私はキジでも、アムール川下流域地方のその他の場所でも、そのような類似のものを見たことがなかった。オリチヤギリヤークの生活において、彼ら自身のものも、中国製や日本製の陶磁器の食器も見ることがなかった。唯一の希少な例外は、ウォッカ用の小さな陶器製のカップだった。アムール川下流域における陶磁器生産の衰退は、満洲・中国政府が上記の措置を講じた時期、つまり同地域における交易、行政、政治的活動の停止と同時期に起こったことが知られている。このような一致は、単なる偶然として説明できない。むしろ、相互に密接に関連した直接的な結果としてみるべきである。しかし、肯定的な情報の不足により、これらの出来事の関係性は、あくまで仮定的にしか復元できない。陶磁器生産は、間違いなく中国由来のものである。古くからスガリに伝わり、中国人によってアムール地方にも持ち込まれ、彼らはその活動に参加していた。ロシア人の恐怖にさらされ、アムール川下流域における中国の支配が衰退するとともに、アムールからスガリに撤退させられた中国人たちの中には、陶磁器の生産に従事していたものもいたと思われる。彼ら全てが中国政府の勅令に従っていたかどうかは断言できないが、アムールでの陶磁器生産が全面的に停止されたことを考慮すると、その可能性はより高いと考えられる。もし数人が現地に残っていたとしても、政府の支援を失ったことで、彼らは完全に無防備な状態になってしまった。どうやら、争いや破壊、さらには土着民を巻き込んだ流血沙汰の諍いなしに物事を処理することはできなかった。このように、間宮林蔵が《特に多くの陶磁器工場》があったとしたその場所は、私が訪れたときは荒れ果てて、人間の骨が散乱していたのだった。

言うまでもなく、国内唯一の交易の拠点の廃止と交易関係の弱体化に関する出来事は、その地域の貧困化と荒廃をもたらした。実際に、かつて交易活動が盛んだったキジ湖の湖岸とその付近は、今ではアムール川

下流域のオリチの土地のなかでも最も荒廃した場所となっている。アムール川沿いのオリチの村で最も人口が多い村は、今日、キジから北側に位置し、ギリヤークの土地との境界付近にある（チリヴィとティルのようだ [309 頁 注 2]）。反対に、キジの南側の地域には、キジからアジというオリチの最後の居住地まで小さな村落しか存在せず、しかもそれらは2つか3つ、あるいは1つのユルタから成り、多くはオリチではなくゴリドが住んでいる（そのような村にはディアラ、ヒヴヴンダ、サマハグドゥなどがある。また、別の場所で述べたことを繰り返すが、私の時代にはディアラ村に属するユルタには1つだけではなく両方ともゴリドが住んでいた。そして、サマハグドゥは高くない場所、ヒヴヴンダよりやや下流にある [310 頁 注 1]）。上述のような出来事は、明らかに南部から北部へオリチを追いやるものであり、反対に、ゴリドの一部は満洲の迫害を避けて、荒廃した土地に住むことになった。この移動は、私の時代にも続いていた。したがって、その後のディアラ村の住民たち一後に移住してきたゴリドも含む一が、かつてここにあったデレンでの交易に関する私の質問について、何の情報も伝えられなかったのは当然であった。

### 【アムール川上流域の交易活動】

アムール川上流域に関して、私はその地域の川沿いを辿った、たった一度の調査でしか知らない。その様子は、現在、交易について語る際は、アムール川下流域が示す関係に比べて、一般的で最も特徴的な点のみの言及にとどめる必要がある。まず、アムール川上流域の異民族について、アムール川下流域に生活が最も近いピラル、マネギル、オロチョン<sup>xxxix</sup>について取り上げよう。彼らの交易品と、それと交換で得る品々は、他の民族とほとんど同様である。狩猟によって第一に得られる交易の対象物は、私たちが既に今まで見てきたように、わずかな量的な違いがあるにすぎない。後者については、一般的に衣服用の布や、食料や嗜好品から成っており、これらは既に何回か示したように原始的な民族にとって必要不可欠なものになっている。アムール川上流域とアムール川下流域の異民族の交易のなかで唯一存在する違いは、彼らの隣接する文化的民族との関係によるものであり、それはその地域の他の地理的・政治的な条件によって規定されている。ロシア人によるアムール川下流域の占領以前、土着的な住民は、トゥグル川流域での稀な出会いを除け

ば、少しもロシア人との交流はなかった。これらの土着民は、日本人や中国人とはるかに多くの接触があり、その上、彼らの交易の主要な中心地は最終的にはスングリに依存する傾向がある。中国の商品は、中国商人によって、またオリチ、ゴリド、ギリヤークによって、スングリからアムール川に沿ってオホーツク海に広がり、サハリンを渡り、南へ進み、日本人まで届いた。このように、アムール川下流域は、西側をスングリ川で閉ざされており、交易については完全にその川に依存していた。したがって、それはある意味スングリ地域の延長のようなものであり、海まで続き、その最前線に位置するサハリン島を含むものだった。

アムール川上流域の異民族たちは、全く異なる状況にあった。彼らの大陸的な立地と海からの遠さは、日本人と接触することを不可能にしていた。別の側面では、中国政府の政治的な政策により、彼らはスングリから遠ざけられ、アムール川下流域との密接な連絡は許されなかった。17世紀の中国政府の政策はロシア人の侵入に対するもので、それによると、アムール川上流域からスングリへの通路は封鎖されていた。これに基づくと、今でもそこへは直接的な交易や航行は許されておらず、上流と下流域に住む土着民同士が相互に連絡をとる自由は阻害されている。ゆえに、地理学的な力と政治的な条件により、ピラル、マネギル、オロチョンのようなアムール川上流域の異民族の交易は、主に西と北、すなわちアムール川の源流、あるいは、いわゆるロシアのダウリヤとレナ州に向かっている。南では、交易は全てゼヤ川とブレヤ川の河口間に位置するアムールの文化圏に集結しており、この地域は満洲人、中国人、ダウール人によって所有されている。まさにこの場所に、アムールの上流、より正確には中流にサンシンに相当するアイグン〔愛琿〕という都市がある。この都市は、中国のヘロングキヤング〔黒龍江省〕に属するアムール川上流域全体を管轄する行政の中心地であるチチカル〔齊齊哈爾〕に依存している。ゆえに、スングリ川の河口ではなく、ノニ川〔松花江の主要な支流である嫩江のこと〕にあるチチカルこそが、アムール川上流域とスングリ地域の間の交易関係の接続点となっている。

### 【各民族の関係】

我々は既に、ロシア北方のトナカイ・ツングースと先述の民族を互いに分け隔てる境界の不明確さと複雑さについて述べた。同時に、オロチョン、マネギル、

ビラルの交易活動、シベリア郊外に住むロシアやヤクートに關係する活動を結びつける糸が、いかに多く、多様で、複雑にもつれあっているかについても述べた。スタノヴォイ山脈に沿って散在するツングース種族の間には、実際には明確な境界は存在しない。彼らはロシアの支配下にあるか、中国の貢納民となっている。また、暴力に訴えることなく、政治的協定により、常に遊牧生活を送る狩猟民との間に完全に不可侵な境界を確立し維持することは不可能である。彼らの交易の商品である毛皮は当然のように最も需要が高く、関連した最も便利な交通手段が存在する場所に集まる。両民族間の交易の促進の実現に向けたあらゆる好ましい要素の關係を詳細に検討する必要はないと考えるが、しかしながら、私は少なくともここで簡潔に主要な要素について指摘しておかなければならない。

オロチョンの大部分の土地は、東シベリアで最も人口が多い地域、ロシアのダウリアの地域に直接隣接している。したがって、大きな川を通じて直接の交通路を有しているならば、オロチョンが交易においてダウリアの人たち<sup>xxx</sup>に依存しているのは当然のことである。毛皮交易におけるロシア人の活動の活発化も、これに大きく貢献している。シベリア全域で知られるこの活動は、アムール地方への玄関口であるこの地域ではさらに活発に行われており、17世紀にロシアのコサックが侵入して以来、この地域は尽きることのない黄金郷として知られ続けてきた。すでに述べたことに加えて(第1巻、82ページ[312頁、注1]参照)、オロチョンの土地には、状況に応じてあちこちに出現しては消える多くの小さな交易センター以外にも、アヤン川とオールド川の合流地点には恒久的な中心地も存在し、毎年12月になるとロシアのコサックや交易商人たちがオロチョンから動物の毛皮を購入するために集まる(マーク、『アムールの旅』、316頁[312頁、注2])。しかし、ロシア人とこのような關係にあるのは、アムール川とその北部に住むオロチョンだけである。一方、大興安嶺東斜面、ノニ川に面した地域に住む人々は、毛皮を現地の中国人やダウール人に販売している。後者のダウール人は、その場で有利に毛皮を買いだめするために、オロチョンの狩猟に同行することも珍しくない。

### 【サハとの關係】

ロシアの商人や猟師が、より遠方のマネギルやビラルを訪問するのはごく稀になっている。その代わり、

最近はこの交易要素が普及しており、その代表格が北方のレナ州やウダ方面から来るヤクートである。ツングースとの關係において狡猾で経験豊富で見聞の広い商人であるヤクートは、ツングースの土地に住みつき、彼らの移動に付き従い、巧みに交易を成立させる。上記で既にミッデンドルフ(Schmidt, Histor. Ber. etc. (Beitr. zur Kenntn. des Russ. Reiches, Bd. XXV, p.36.) [312頁、注3])のゼヤ川とブレヤ川の岸辺で行われる数多くの取引に関する報告を引用した。猟師たちの需要と弱点を熟知しているヤクートの商人は、彼らが必要とするものを全て供給することができるが、その代わりに彼らを搾取し、適時に貸付を行うことで、彼らを返済不能な債務者にしてしまう(シュミット、1. p.133. [312頁、注4])。マネギルやビラルがヤクートから受け取るロシア・シベリアの商品のなかには、彼らが非常に好む小口径のライフル銃がある。この銃は、数は多くないものの、既にアムール川下流域のサマギールに浸透しており、中国式の長く重さのある火縄銃は競争できない状況にある。

しかし、マネギルとビラルが狩猟で得た獲物のうち、ヤクートのおかげでレナ州北部で販売することができているものが部分的にあるとしても、彼らの主要な交易は依然として南部のアムール地方に向けられている。これら異民族の大多数は、毎年夏になると少なくとも漁業のためではあるが一時的に川沿いに移り住む。そこは満洲人、中国人、ダウール人が野菜やタバコなどを育てる産業的な農業の中心地で、マネギルとビラルは、都市のアイグンまで来て、衣服の素材や食料、嗜好品などを、商人が彼らの土地で取引するのと比べてはるかに安い値で得ている。しかし、疑いなく、アイグンにある中国政府は、サンシンやかつてのデレンのように、訪れた土着民から自由な交易権の代償として毛皮の貢物を取り立てることを忘れていない。同様に繰り返すように、チチカルでも、「ブトゥハニ」<sup>xxxi</sup>すなわちソロン、ダウール、オロチョンや他の地方の土着民は中国の貢納者であった。パラディの証言によると、そこでは毎年6月から7月にかけて「チュルハン」が行われる。これはすなわち、大規模な定期市で、先述の異民族が多く集まり、一時的に都市の周囲に天幕などを建てて滞在する。まず、クロテンの毛皮が貢物として持ち込まれ、穀物や金銭などの返礼品が送られる。そして、定期市が開かれ、毛皮製品や家畜の交易が始まるが、その主役は中国商人たちが占めている(アルヒマンド

リート・バラディ・ドロジ「北京から満洲経由のブラゴヴェツェンスクまでの調査の覚書」(ロシア帝国地理学会誌、地理学一般、第IV巻、1871年、429頁)。クロテンの毛皮による貢納の総額は、バラディウス(バラディ)が5500枚と算定している[313頁、注1]。

### 【ダウールについて】

それにもかかわらず、アムール川上流域における土着民との交易で重要な地位を占めているのは中国人ではなく、ダウール人である。コマル川[現在はフマル河あるいは呼瑪河と呼ばれ、アムール川の上流で右岸(中国側)から注ぐ支流]のマネギルや、大興安嶺の斜面沿いのオロチョンとの全ての交易は、彼らの手中にある。ダウール人は、自身の商品と中国製品を携え、ゼヤ川とブレヤ川とその支流に沿ってスタノヴォイ山脈に達し、溪谷に入り込む。そこはマネギル、ピラルなど他のツングース種族と交易を行う場所であり、ダウール人は、北方からやってくるヤクートと首尾よく競合している。先述のように、時折、彼らはブレヤ川あるいはシリムジ川[あるいはセレムジャ川、ゼヤ川の左岸に注ぐ主要な支流]源流からヤム・アリンスキー山脈を越えて、ネギダールやギリヤークも訪れるトゥグル、ブルカンの交易の中心地に行く。このように、交易に長け、巧妙な取引をするダウール人は、ツングース種族の諸民族が交易関係において無能であるという一般的な法則の例外のように思われるかもしれない<sup>xxxii</sup>。しかし、次に述べることを忘れてはならない。それは、彼らはアムールからノニへの移住の結果、モンゴル人や中国人との強い交流にさらされ、多くのものが、交易における嗜好や活発さを含めた習慣を獲得したことである。アムール川上流域における彼らの交易の成功は、中国人よりもむしろ満洲役人によって示される保護により、一層促進されている。また、ダウール人はマネギルやピラルから徴税する権利を与えられており、きっと大規模な抵当や納付金を条件としているだろうが、彼らの機転の良さにより十分な報酬を得ることができている。彼らの交易活動に共通する複雑さは中国人の活動、さらにアムール川下流域のギリヤークの活動の方に匹敵するかもしれない。ダウール人は、自身の商品と、特に中国製品を近隣諸国の境界を越えて広範囲に流通させ、現地の土着民が狩猟で得たものを巧みに扱うことに成功している。いずれにせよ、アムール地方で最も秀でた民族で

あるダウールとギリヤークという2つの民族は、前者[ダウール]はアムール川上流域の代表として、後者[ギリヤーク]はアムール川下流域の代表として存在している。しかし、アムール地域の境界にあるトゥグルの1つの交易拠点を除けば、先述の両方の民族は、他のどこにおいても直接的に出会わないことは注目すべきである。これは、アムール地域の地理的・政治的条件のもとで生まれた個別化の結果である。個別化は、その地域に住む異なる民族間の交易関係の基礎になっている。この個別化は、彼らの中で著しく異なる違いをもたらす民族的条件を生み出し、絶えず維持されている。

### 注

- i) シュレンクが述べる「オロチ」は、現在のオロチだけでなくウデヘも含んでいる。
- ii) 原文では、マミア・リンソ(Мамия Ринсо)、およびト・タツ・キコ(То-татс кико)と記載されている。『東鞆紀行』とは、間宮林蔵(1780-1844)が口述し、村上貞助(秦貞廉)が筆記したものを指す。この本はその前編に当たる『北蝦夷地部』(東京国立博物館所蔵)とともに1810年秋に完成した後、改訂浄書され、翌1811年に『東鞆地方紀行』、『北夷分界余話』と題されて幕府に献上された。それらは幕府の御文庫(紅葉山文庫)に収蔵され、明治期になって内閣文庫の蔵書を経て、現在は国立公文書館の内閣文庫コレクションの一部となっている。原典は重要文化財に指定されていて原則として閲覧不可だが、高精細画像が国立公文書館のウェブサイトで開催されている。冒頭の「解説」でも触れたが、Ph. Fr. von シーボルトは浄書前の『東鞆紀行』や『北蝦夷地部』を底本とする写本に基づき、ドイツ語に翻訳して主著『Nippon』に掲載したと考えられていた(例えば、洞・谷澤 1988: 278-280)。しかし、『Nippon』の原典(1975年に講談社から刊行)やその翻訳(1977年に雄松堂出版から刊行)を参照したところ、シーボルトが「われわれは林蔵と個人的に知り合い、江戸の将軍の図書館にあったその旅行記・地図・挿絵を閲覧する機会を得た。そして注目に値するものは写しを作成し、その大部分をヨーロッパに送った」(Wir hatten Gelegenheit Rinso selbst kennen zu lernen und dessen Reiseberichte, Karten und Abbildungen, welche sich in der bibliothek des Sjogun zu Jedo befinden, zu besichtigen und von den merkwürdigsten Stücken uns Abschriften zu verschaffen, welche wir grösstenteils mit nach Europa gebracht haben.) (シーボルト 1977a: 256; Siebold 1975a: 129)と記しているところから、シーボルトは1826年の江戸参府の際に「将軍の図書館」(der bibliothek des Sjogun)すなわち紅葉山文庫に所蔵されていた浄書された『北夷分界余話』と『東鞆地方紀行』を目にして、写しを取った可能性がある。
- iii) 現在はトゥムニン川と呼ばれる。この川はシホテ・アリニ山脈を発して、日本海に注ぐ。
- iv) これらの川はヤイ川水系の支流と考えられる。
- v) シュレンクは国家としての日本を表すときにはЯпонияといい、民族あるいは国民としての日本人についてはяпонцыというが、時折、アイヌ語やニヴフ語で日本あるいは日本人を意味するsisamに由来するсизамという言葉も使用する。本稿ではяпонцыを「和人」と訳し、сизамは「シザム」と訳すことにした。
- vi) 文化露寇事件(1806~07年)のこと。1804年に長崎を訪れたレザノフが日本との交渉失敗により、露米会社の士官に命じたことで生じたロシア海軍による襲撃事件。命じられたニコライ・フヴォストフとガヴリール・ダヴィドフは1806年に樺太、07年にエトロフを襲撃し、日本側に多大な被害をもたらした。

- vii) 漢語では三姓、満洲語では ilan hala という。新しい城という意味で満洲語で ici hoton と呼ばれることもあり、「イチャ・ホトン」はそれを意味していると思われる。現在の中国黒竜江省哈爾濱市依蘭鎮に当たる。
- viii) 清側の記録では毛皮貢納のためにやってきたものには旅費として穀類や酒などの食料が支給された(遼寧省檔案館等編 1984: 354-371)
- ix) ロシア語では выбойчатка で、恐らく型染めなどの技法で染色された木綿の布かと考えられる。
- x) 露里ともいう。1 ヴェルスタ = 1.06 キロメートル
- xi) 間宮林蔵の正式の報告書の一つである『北蝦夷島地図凡例』(国立公文書館所蔵)と対照すると、サイ(ジャイ) = チャエ、ホルベ(ホルビ) = コルヘー、クヴォレ(クプトウイ) = ホットロ、ウルゲ(ウイッリ) = ウルゲーである
- xii) 間宮林蔵の『東韃地方紀行』巻之中では「群夷騷擾」と題する挿絵が入っている。
- xiii) 満洲語のハラ・イ・ダ hala i da、すなわち氏族の長
- xiv) 満洲語のガシャン・イ・ダ gašan i da、すなわち村長
- xv) 「解説」でも触れたが、間宮林蔵の『北夷分界余話』附録(国立公文書館蔵)によればボホカヌーはタムララー(タムリヤ・ヴォ)の「酋長」すなわちハラ・イ・ダの名前であって、地名ではない。これはシーボルトの誤訳(Siebold 1975b: 180)によるシュレンクの勘違いの一つである。
- xvi) 3人のハラタの内、林蔵が名前を知り得たのはイトイのトルベイスとカウトのウルトゴーで、3人目のトワガー(別名メルコアー)のハラ・イ・ダの名前は記されていない(『北夷分界余話』附録(国立公文書館蔵)による)。しかし、トワガーのハラ・イ・ダの子孫は西海岸のタムララーに移住しており、上記のボホカヌーはその一人ということになる。このときの満洲役人は樺太北部にしか行ってないため、彼らはニヅフだった可能性が高い。
- xvii) 間宮林蔵の記録では「黒貂皮」(クロテンの毛皮)となっている(『北夷分界余話』附録)。シーボルトの訳では「schwarzes Seeottterfell」(Siebold 1975b: 180)となっていて、これは黒いラッコの毛皮という意味だが、完全な訳し間違えである。
- xviii) 『北夷分界余話』附録(国立公文書館蔵)によれば、4人の老人とは、トコンプのフーレルシクル(およそ75歳)、トンナイラロのクネットミ(およそ70歳)、ラコーのイバナシユイ(およそ70歳)、ナヨロのモンチーカンテ(およそ75歳)である
- xix) カンテツロシケとヨーチイテアイノ
- xx) この事件が起きたと思われる18世紀前半の段階では、満洲の役人たちが来て毛皮貢納を受ける場所はキジ湖湖口にあったキジ・ガシャンであり、デレンはまだなかった。シュレンクの勘違いである。
- xxi) 原文はタターリヤ(Tataria)
- xxii) 林蔵が記したハラ・イ・ダ、ガシャン・イ・ダの名前と居住地は表1と図2を参照
- xxiii) 訳注 xvii 参照(林蔵の原典ではクロテン(黒貂)であり、シーボルトの誤訳に基づく)
- xxiv) シロトマイノのこと。彼の任命についてはカラフトナヨロ惣乙名文書(ヤエンコロアイヌ文書)2号文書(北海道大学附属図書館蔵)を参照のこと。
- xxv) 林蔵の『東韃地方紀行』下(国立公文書館蔵)によれば、正確にはアムゲン川(ホンコ川)に沿ってアムール川に出入りしていたのは「其名イダーと称せる魯齋亜の属夷」であり、イダーはシュレンクの時代以来ネギダールと呼ばれた民族である。
- xxvi) これは1654年~56年頃にかけて清が実施した政策である。清はアムール川流域に大挙して侵略してきたロシア軍を兵糧攻めにするために、ゼーヤ川流域やアムール川中流域にいたダフルとソロンをノンニ川流域やフルンブイル方面に強制的に移住させ、また、松花江とウスリー川の河口の間にいた住民も松花江方面に待避させて無人化した。これによりロシアは食料をはじめ物資の調達に苦しみ、1658年に松花江河口で行われた清との戦闘で完敗し、一時完全にアムール川から撤退する。
- xxvii) 間宮林蔵の『東韃地方紀行』上と『東韃地図』(ともに国立公文書館所蔵)によれば、「ヌックランガター」はキジ湖の北岸にある地名で、林蔵はここで一夜を明かして、日本の厳冬期のように寒かったと記し

ているだけで、人が住んでいたとは書いていない。

- xxviii) 「解説」でも触れたが、この「陶磁器工場」もシーボルトの誤訳によるシュレンクの勘違いである。林蔵の原典『東韃地方紀行』上(国立公文書館所蔵)によれば、「其器械亦悉く満洲の物にして陶器など多く」となっている。それをシーボルトが、「ここには実に多くの陶磁器工場があった」[Es befinden sich hier besonders viel Porzellanfabriken.] (Siebold 1975b: 172) と訳していた(シーボルトの息子たちが編集に携わった『Nippon』の1897年版では、「ここでは特に大量の磁器が生産されていた」[Es wurde hier besonders viel Porzellan angefertigt.] (Siebold 1997: 212) となっている)。しかし、多く見られた陶器が地元で生産されたとは林蔵は記しておらず、交易でもたらされたものである可能性の方が高い。同様のことはシーボルトを日本語訳した加藤九祚も指摘している(加藤 1986: 232-233)
- xxix) 現在の中国側にいる彼らの子孫たちはオロチョン(鄂倫春)と呼ばれ、ロシア側ではエヴェンキと呼ばれる。
- xxx) アムール川中流域兩岸とゼヤ川流域に居住する人びとのことを指す。
- xxxi) プトハ(布特哈)とは、ソロン、ダウル、オロチョンといった狩猟・遊牧社会をつくる人たちから編成された八旗の子孫を指す。
- xxxii) ここでシュレンクがダウル(ダフル)をツングース系の民族のように扱っているが、それは彼がダウルをそのように見誤っていたからである。言語学的にはダウル語(ダフル語)はモンゴル語に属する。しかし、ダウルには満洲語を習得するものが出て、満洲自身が固有言語を失った後も、長らくそれを保持していた。

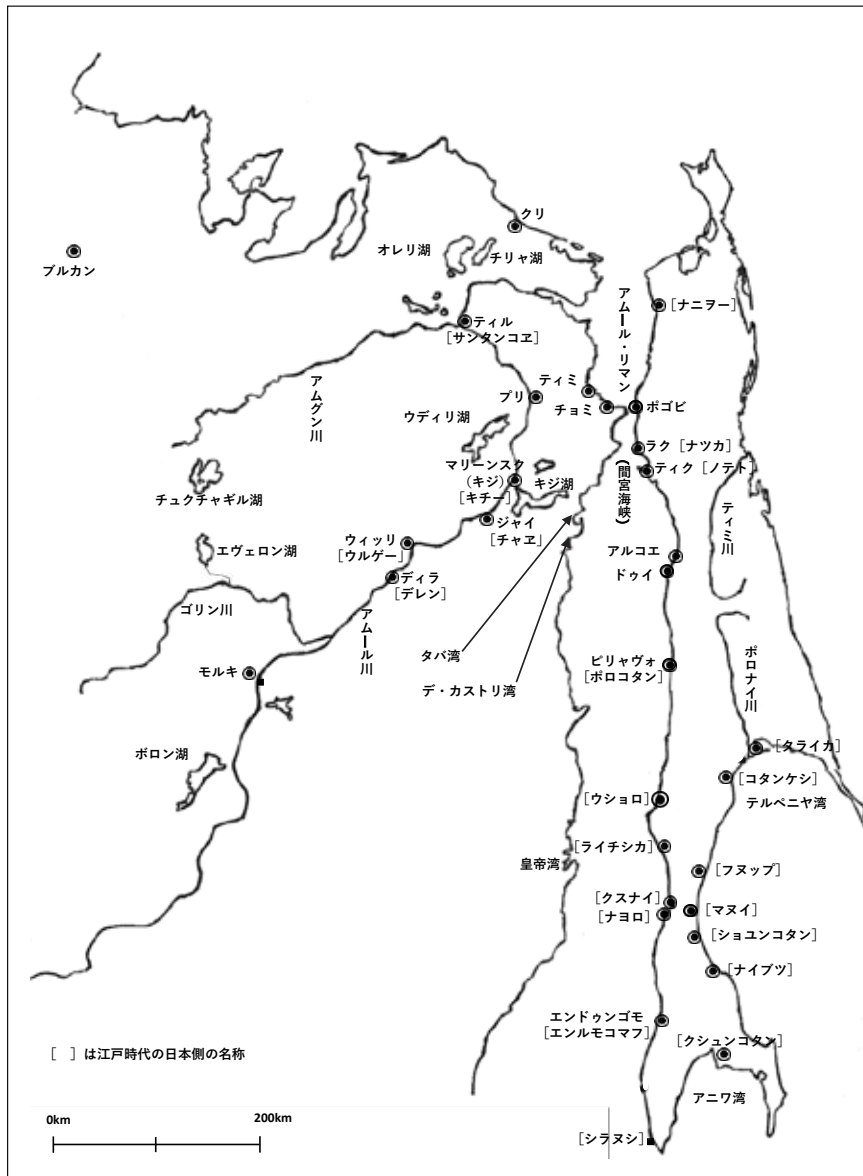
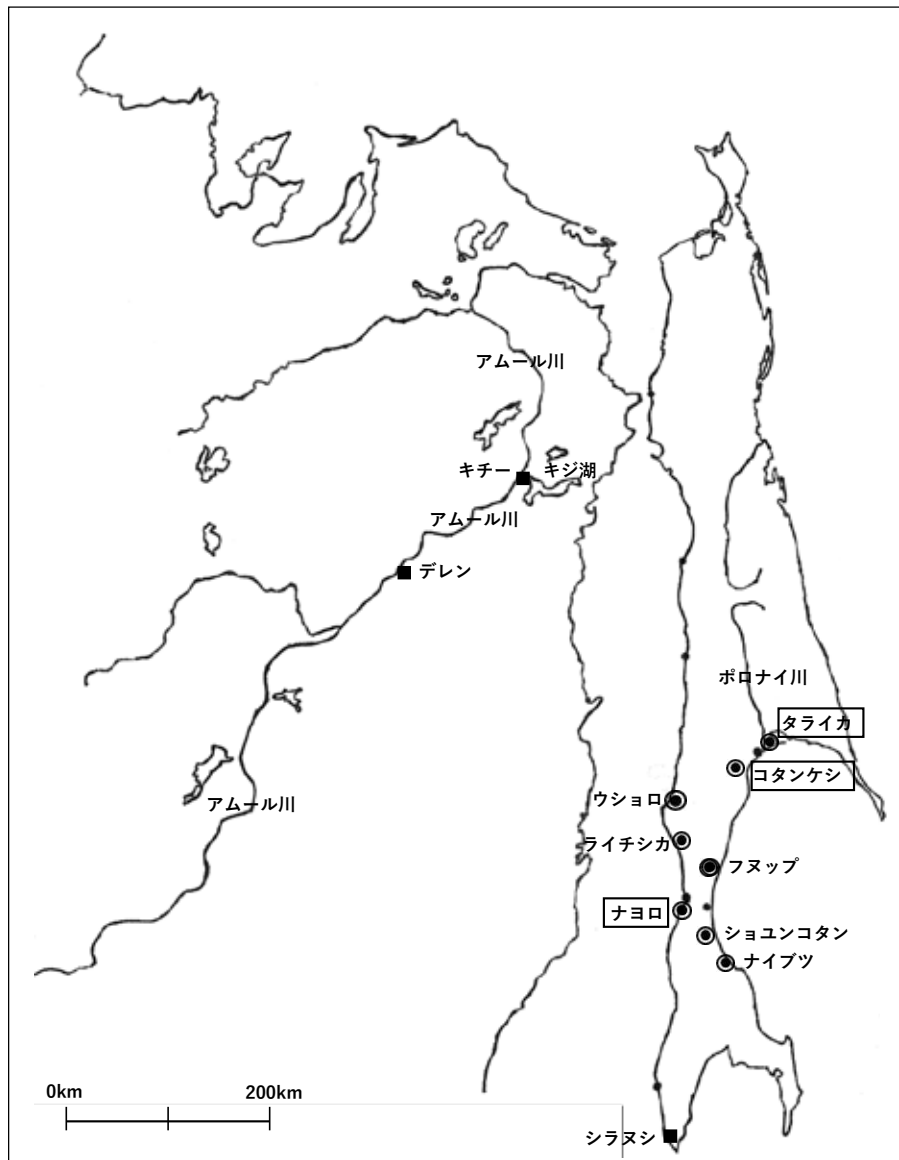


図1 19 世紀中葉のアムール川流域およびサハリン周辺の地図

表1 1807、08 年頃のアイヌの清朝役職者の村落

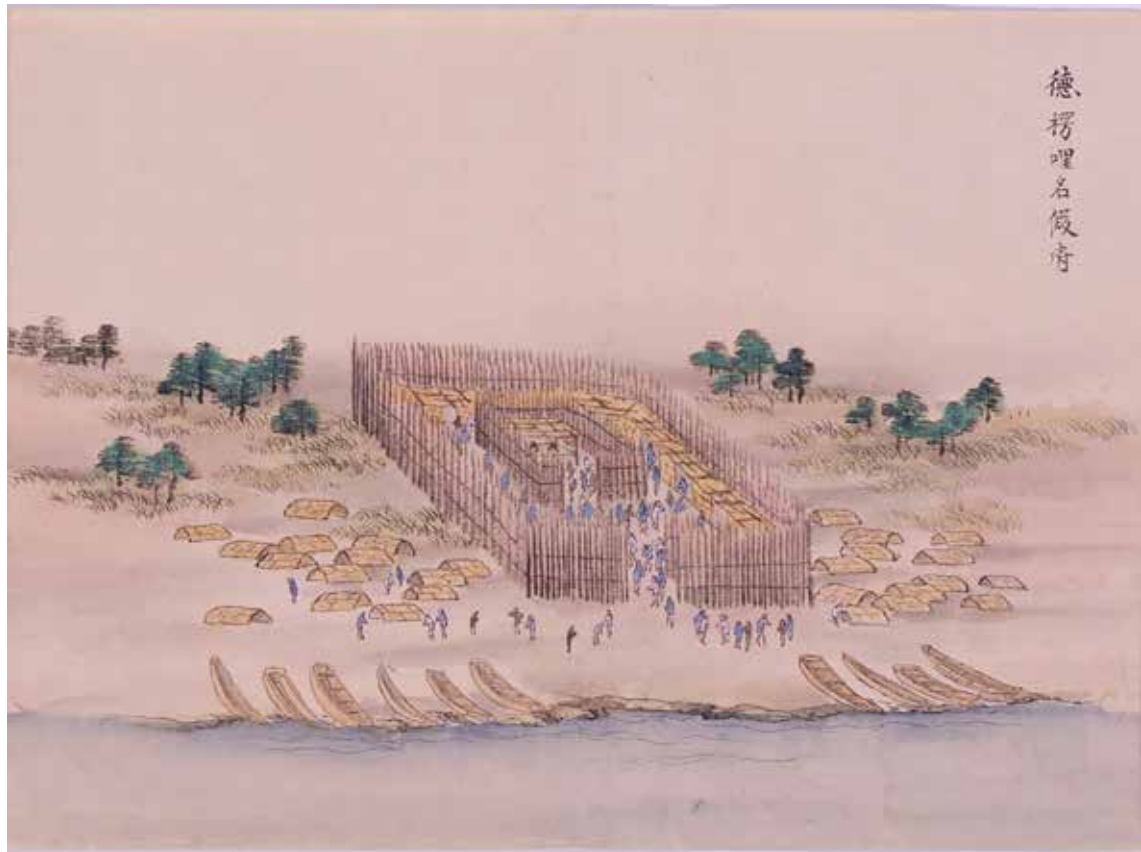
| 西海岸の村落<br>(コタン)   | ハラ・イ・ダ<br>(氏族長)      | ガジャン・イ・ダ<br>(村長) | 東海岸の村落<br>(コタン)      | ハラ・イ・ダ<br>(氏族長) | ガジャン・イ・ダ<br>(村長) |
|-------------------|----------------------|------------------|----------------------|-----------------|------------------|
| ナヨロ<br>(ヤダン・ガジャン) | ヤエンクルアイノ<br>(ヤダン・ハラ) | シロトマアイノ          | ナイブツ                 |                 | リイレルアイノ          |
| ライチシカ             |                      | モニシューコテ          | フヌップ                 |                 | シカリカト            |
| ウショロ              |                      | センバクル<br>イコランゲ   | ショユンコタン              |                 | ニシカニ             |
|                   |                      |                  | コタンケシ<br>(クタンギ・ガジャン) | (シュルングル・ハラ)     |                  |
|                   |                      |                  | タライカ<br>(ダリカ・ガジャン)   | (トー・ハラ)         |                  |

(ガジャン・イ・ダの名前は間宮林蔵口述・村上禎助筆記『北夷分界余話』附録による)  
 コタンケシとタライカにはそれぞれシュルングル・ハラとトー・ハラのハラ・イ・ダがいたことは間宮林蔵の前に樺太を調査した中村小市郎の調査(1801年)でわかっている。しかし中村によれば、彼が行く頃までに両村落の家系は衰退して、ハラ・イ・ダ不在の状況だった。



- ハラ・イ・ダ、ガシャン・イ・ダがいた村落の位置  
四角の枠はその村落にハラ・イ・ダがいたことを示す
- 日本と清の出張所があったところ

図2 ハラ・イ・ダ、ガシャン・イ・ダがいた村落



参考画像1 市場の様子（『東韃地方紀行 中巻』国立公文書館蔵）



参考画像2 最上級の役人の服装（『東韃地方紀行 中巻』国立公文書館蔵）



参考画像3 二番目の階級の役人の服装 (『東韃地方紀行 中巻』国立公文書館蔵)



参考画像4 船の様子 (『東韃地方紀行 中巻』国立公文書館蔵)



参考画像 5 仮小屋の様子 (『東韃地方紀行 中巻』 国立公文書館蔵)



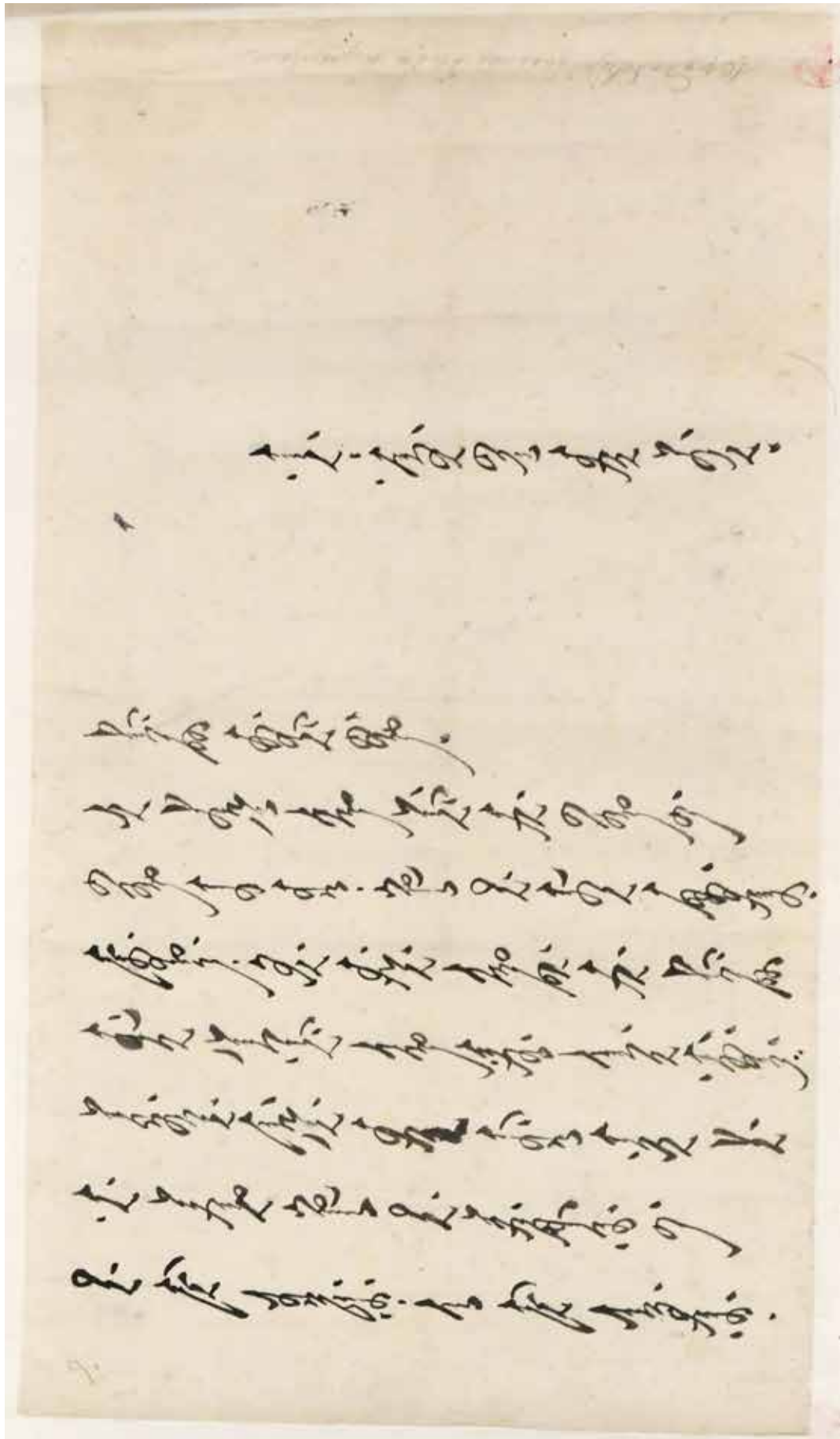
参考画像 6 〈贈り物〉を贈る様子 (『東韃地方紀行 中巻』 国立公文書館蔵)



参考画像7 混雑する市場の様子 (『東韃地方紀行 中巻』 国立公文書館蔵)



参考画像8 毛皮を販売する様子 (『東韃地方紀行 中巻』 国立公文書館蔵)



参考画像9 シトクレランの父の任命について満洲語で記した文書  
『カラフトナヨロ惣乙名文書(ヤエニコロアイヌ文書)』2号文書(北海道大学附属図書館蔵)